



↑初代新潟教区長、ヨゼフ・ライネルス神父 (1874—1945)
←昭和10年ころの異人池(手前)と双塔がそびえる新潟教会大聖堂

新潟教区を新設、神言会に託す 山形・秋田・新潟と北陸三県 初代教区長に ライネルス師

●1912(大正1)年8月13日 新潟教区が、これまで函館教区に所属していた山形、秋田、新潟の三県と東京教区の一部であった富山、石川、福井の三県をあわせ知牧区として新設され、神言会に託される。同年11月19日、哲学博士ライネルス神父が初代新潟教区長に任命される。神言会日本管区長のチェスカ神父は管区本部を新潟に置いていたので、新しい教区長は金沢に教区本部を置いていたが、大正十年代に入ると、教区長自身は秋田に滞在していた。

の金網ロックスタック塗り。内部は正面大祭壇のほか、左右二つの副祭壇が設けられ、大祭壇へ向かう中央通路の両側には、約500人のための畳敷き座席が、後方階上には聖歌隊席が備えられた。天上丸窓の色ガラスを通して差し入る光線が、祭壇上にあやなす影を投げ、白い天井やクリーム色の壁などとよく調和した、落ち着いた気分を作り出すのも、当時の人の目には非常に美しく映じたようである。明治以来異人池と呼ばれ、ボートまで浮かべられている池のほとりに、大きなポプラ並木に囲まれて建つこのエキゾチックな大聖堂は、その後たびたび絵画や詩の題材に選ばれた。(青山玄『新潟教区宣教小史』より)

献堂式には、県知事、医大学長、師範学校長をはじめ、各小・中学校長、市教育長、市議員、実業家ら、そうそうたる顔ぶれが参列、岩下壮一神父の説教が堂内を感動で満たした。正午、新築の伝道館で催された祝賀会では教皇使節や知事の祝辞に続いて幼稚園児の劇などがあつた。当日と翌日の夕方から講演会と聖劇会が開かれたが、各新聞が聖堂完成のニュースを報じていたため、両日とも大盛況であった。この献堂式後の数年間はカトリック教会の行事や活動が地元各紙に大きく取り上げられ、市民の関心を集めるようになった。なお、昭和3年2月19日、新潟大聖堂の鐘が祝別され、昭和4年5月19日の聖霊降臨の大祝日にドイツ(パデルボルン)製パイプオルガンが設置された。現在も使用されるが全国的にも珍しい貴重なものといわれている。また、天井から吊り下がった大きなランプは、東京麹町教会(聖イグナチオ教会)の旧聖堂にあった“遺品”で、同聖堂が新築されたのを機に平成10年3月、新潟教会に移設された。

双塔の新潟大聖堂が献堂

●1913(大正2)年9月18日 大正2年に計画されながら、第一次大戦の勃発で遅れていた新潟教会大聖堂の建設はアントン・チェスカ教区長時代の1915年12月3日に建設用地を祝別し着工、翌年9月上旬に完成、この日(日曜日)午前9時から教皇使節ジャルディニ大司教によって献堂式が行われた。

王たるキリストに捧げるこの聖堂は、1924年に来日したスイス・チューリッヒ生まれの、当時すでにジュネーブ国際会議場の設計などで国際的に知られた新進の建築家マックス・ヒンデル(Max Hinder)の作品。施工は新潟のコンクリート工業。

「間口7間、奥行14間、建坪98坪という木造新聖堂の、地盤線から屋根の上までは33尺(10.16m)、5層からなる双塔の上端までは75尺(22.77m)に達した。その建築様式はロマン式とルネッサンス式との折衷で、外壁は堅牢耐火性

カトリック山形教会報 かすみ

11
2012.11.17

カトリック山形教会
〒990-0039 山形市香澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3590
ホームページ <http://www.catholic-yamagata.com/>



全日程を終了し、帰途の前に司教座聖堂の前で新庄教会の信者とともに記念写真

特集／新潟教区創立100周年記念

新潟教区100周年を迎え感じたこと

カトリック山形教会信徒会長 沼沢敬志

新潟教区100周年おめでとうございます。山形教会からも多くの方が記念行事に参加することができうれしく思います。

私は、教区100周年実行委員として委員会の立ち上げから準備に関わりましたが、記念行事に参加した信徒が、お祝いに参加できて良かったと感じるだけでなく、100周年を迎える新潟教区の信徒の一人ひとりが、これまでの自分をもう一度見つめ直して新たな気持ちでキリスト者として生きていくことと、普段は教区内のそれぞれの小教区で集まっている信徒全員が同じ新潟教区の仲間であると再確認する機会にしようと、委員会メンバーで意見を出し合い準備を進めてきました。

準備委員として活動する中で、苦勞している割には成

果が見られず悩んだこともあり、動きまわっているだけでは、なかなか物事の本質は正しく捉えられず、持っている情報を確認し整理して、次の手を考える時間が非常に大切なこと、この時間を大切にしないと物事はうまく進まないことを改めて気付かされました。そして、私達カトリック信者の日常において考える時間が「祈り」であり、いろいろな出来事を整理して次の手を導き出す手法が「信仰」なのではないかと思うようになりました。

私達は、新たな100年に向けて「私の宣教宣言」をしました。それぞれの宣教宣言が成し遂げられるように、山形教会に集うみんな「祈り」を大切に「信仰」を深め合い、一人ひとりが成熟した信徒となり、成熟した山形教会を作れるように皆さんと力を合わせて行けたらと思います。

記念講演『今の私の宣教宣言』

フランススコ・ザペリオ 矢野 満

— 全人的発展に向けた和解の奉仕をめざして —
瀬本正之神父(イエズス会)上智大学神学部教授が講演されました。自己紹介を兼ねて、思いつくままにと、およそ年代ごと六つの項目に分け御自分の魂の命ずるままの目標として述べられました。私なりの観想を交えながらご紹介してみます。注：「」は瀬本神父が表明された目標です。

①「被造物を自身のいのちのあふれに招き入れられる御父に聞き従います。」

宇宙全体をと言うことで、御父の声に聞き従い、全身全霊を御父に捧げる、これが信仰の真髄かなと感じました。

②「主キリストご自身の和解の奉仕に連なります。」

和解の奉仕にイエズス会も参加したい。例えば中国韓国など時間を掛け和解に導きたいと話されました。世界の平和を目指す宣教の原点・精神と思います。

③「いのちの賜物に思いを致すよう促される聖霊に場を空けます。」

自然界と神と(最重要)自己に心を込めてと話されました。聖霊が何時来られてもよい様に心を空けて置くためには、常に心に余裕を持ち準備していなければならないと肝に銘じました。

④「次々世代への責任を進んで引き受ける次世代を育てます。」

まともな人として成長するよう、若い時期からの対応を考え、心して教導して行きたいと話されました。教育者としての責任と義務、当然と言えるかも知れませんが、多くの人々にご指導賜りたい。また、私たちが子育てや若い人が進路を間違わないよう、見守り導いて行かねばと思いました。

⑤「真実な愛に基を置く結婚生活への準備を手伝います。」

共同体全体でも、そのようにして行かねばならないし、またそのようにしたいと話されました。結婚式で読まれる〔使徒パウロのコリントの教会への手紙〕にある〔愛がなければ無に等しい、益するところがない、愛は寛容で…すべてを耐え忍ぶ、愛はいつまでも絶えることがない。〕これが真実の愛と思うし真実の愛を生涯貫けるよう導くのが私たちの義務でもあると感じました。

⑥「愛情から死に至るまであらゆる人の尊厳を尊重する社会の実現を目指します。」

生命は神から与えられた尊いもの、人の尊厳を尊重することが平和な社会の形成の必然性と私も考えます。私は自分の信仰の具体的道しるべとして、今まで自分の気持ちの中でまともな信仰の考えが整理され、述べられた六つ目標を糧に、今後の信仰生活を歩んで行きたいと思っています。外に福音的実践の5つの原理：共通善、普遍的用途性、補完性、参画、連帯。4つの社会的価値：真理、正義、自由、愛。分を弁えた被造物の宣教宣言。原点としての教会づくり。など話されました。

新潟教区創立100周年

「わたしの宣教宣言」を携え、600人を超える信者が集まる



10月7日(日)、新潟教区司教座聖堂で、菊地司教司式のもと、新潟教区創立100周年の記念ミサが捧げられた。



新潟、山形、秋田の各教会を巡った十字架リレーの「十字架」と「リレーノート」が信徒代表から菊地司教へ手渡された。



「困難な中に光り」と菊地司教が言われた、新庄教会のフィリピン出身者が、これからの新たな福音宣教者として期待されている。



記念祝賀会の終盤では、各教会の信者が壇上上がり、菊地司教の伴奏で「マラナタ」、「アーメンハレルヤ」、「聖なる息吹よ」を大合唱。



ユーモアを交えながら記念講演を行った、上智大学の瀬本正之神父。教区の信徒たちから託された、わたしの宣教宣言が奉納される。



十字架リレーの十字架が姉妹教区のハバロフスク教区に渡された。

私の信仰の旅路

フランシスカ 石山 八重子

カトリック教会と私の出会いは、1964年、秋田市聖霊学園短期大学への入学に始まりました。先祖代々、私の生家は仏教で特に信仰熱心な家柄でもなく、ごく平凡な家庭で育ちました。クリスマス行事も何の違和感もなく祝いましたし、幼い頃より十字架やノアの箱船などについて多くを知りたいと思いながら過ごしてきました。将来は幼児教育に携わることを望んでいたこともあり、この学校を迷わず選びました。

入学後は寮生活でしたから、朝の御ミサには進んで足を運び、思ったよりスムーズに学校生活に溶け込めました。倫理の授業の中で「聖マリアの懐胎」について学んだ時の感動は忘れられません。仏教、イスラム教、キリスト教を比較していく中で、キリスト教のみが霊的受胎で、他の宗教は皆、物理的受胎であり、マリアの霊による受胎のことが私の胸の奥を神秘的色で満たしてくれました。

また、ある日のシスターの講話「蜻蛉(とんま)とヤゴの話」を聞いた感動も心に残っています。それは「蜻蛉はヤゴから成長し、一度羽化したら元の水の中に戻れないし、その青空を飛べるすばらしさをヤゴ達に話してやる事もできない。人間も天国へ行ってから戻って来て、すばらしい天国の話をする事は出来ない。」というものでした。

この時、私のもやもやの心は救われました。夏休みに帰省した折、両親にカトリックの教えや、洗礼についてを夜遅くまで話したことを憶えています。その時、両親の返事は「自分の人生だから自分で良く考えて道を選ぶように。親は子どもが幸せな人生を歩んで欲しいのだから…」というものでした。

洗礼を受けて下さったのはオズワルド・ミウラー神父様(ドイツ人)で、霊名はアンジのフランシスカです。彼女は貧民街の孤児達の面倒を見て、一生を奉げ聖人になられた方で、私の目標とさせてもらいました。

職場は町立の保育所なので宗教の色を抑えながらもクリスマス生誕劇は毎年のように喜ばれました。「先生どうして馬小屋で誕生したの?僕は病院で生まれたよ。」その聞き入る子どもの目、輝く目、私もつい熱を込めて話したものです。また、職員の方々も「初めて聞きました。」の声に、私の方も驚いたほどです。幼な子に侮いた小さな種が、カトリックの心が、何時か何処で花を咲かせて欲しい、世界に通ずる人生観を持てる人になって欲しいと夢みながら…。

1993年、佐藤勤神父様より夫が洗礼(イグナチオ)を受けていただきました。長男が医学生の時、解剖が始まった折、学生達も少々ながら平常心ではなかったらしい。後で聞いたことですが、「信ずる心が自分を前へと導いてもらった。」と話していたが、大変嬉しかったです。

35年間の職務を退いた今は、娘家族の子育て応援で奮闘していますが、今回の記念の年に当たり、改めて自分の目指す生き方を思い起こし、福音をのべ伝える事が出来るようにと祈っております。

新潟での百周年記念行事に参加して、私の信仰の歩みをふり返り恵み多い年月を改めて床わい感謝しています。